

研究分野のキーワード：書道実技，書写・書道教育，書道史，書論，書式

研究紹介

①北魏の書体・書風を基にした作品制作に関する研究

北魏の書資料は、石刻と肉筆に大別され、前者は碑碣・墓誌銘・造像記・摩崖、そして後者は写経を中心とします。その中で、今までは、龍門造像記や鄭道昭の摩崖、墓誌銘など、北碑の名品について臨書を繰り返してきました。その中で北碑の書の魅力は理解したつもりですが、未だ自らの書表現においては、満足がいかない状況にあります。北朝の書の特徴をどう把握するのか、肉筆と石刻文字との関係について、特に肉筆資料を研究対象にしていく必要性を感じています。また、並行して、清朝碑学派の名家たちは、古典をどう解釈したのか、さらに精査に見直すことにより、作品制作の一助にしていかなければならないと思っています。今まで、清代では特に楊守敬・趙之謙・何紹基等の作品を取り上げ、臨書を通して書法解釈を行ってきましたが、書人・作品の範囲をさらに広げ、理解を深めていきたいと考えています。

②中国の清代を中心とした書法論の研究

清代には、興味深い様々の書論があります。清朝は、知識人に根付いた実証主義の精神、確実な資料に基づいて事実を客観的に追求する考証学と金石学の発達により、文字学の進展、また書の発展をうながしました。その中で、今後自分の書作とも関わるところで、読み進めていくべきものは多くあります。とくに、用筆・運筆論、用墨論など実作経験に基づく論を展開しているところに注目して整理していきたいと思います。

③書写・書道教育の理論的研究

パソコンや携帯電話が急激に普及して、「手書き」の行為や活動の範囲を狭くするようになってきました。「書くこと」は、思考力、理解力、認識力、記憶力、表現力等、人間の脳の活性化・発達に役立つといわれています。今日的意義・役割をしっかりと見定め、学び甲斐のある書写・書道教育の実践について、教員養成の立場から研究していきたいと思います。

現在は、「標準字体の書き方」ということで、教育漢字に関して検討をしています。漢字使用の目安として定められた「常用漢字表」は文字を明朝体の一種で示し、小学校における学習漢字については、学習指導要領に「学年別漢字配当表」として文字が教科書体で示されています。教科書体は書き文字の実際の参考になりますが、明朝体は書くことを考慮して作られていません。そこで問題となるのが筆写の際の「許容」です。「字体」「字形」「書体」および「許容」を含めた漢字の諸相から書写教育を考えることは重要だと思います。

漢学の教養のない人が多い現在、内容を解釈できない書をどう考えどう見るか、書の文字性・精神性の問題等、課題は少なくありません。単なる視覚芸術で終わるのではなく、そこに学問的裏づけがなされ、思想・哲学をどう盛り込んでいくか、東洋の伝統文化であり、世界に誇る芸術である書に興味関心がある高校生諸君には、是非大学で学んでもらいたいと思います。